

建設環境

加熱矯正採用現場を紹介

豪雨損傷の寄岩橋復旧で

環境建設（本社：喜多）岩橋補修現場で、加熱矯正（関本榮次社長）は「正工法を採用した工事状況を見町の国道252号・寄岩橋は1960年架設

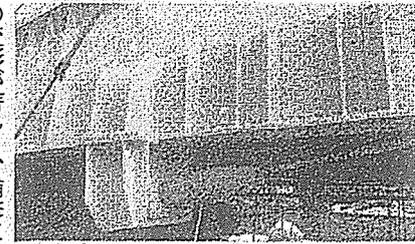
の延長249・7m、幅員6m、4径間連続鋼単純合成板桁橋、鋼単純下路式ランガー桁橋、3径間連続鋼単純合成板桁橋で構成している。

2011年7月の新潟・福島豪雨の影響で損傷し、補修・老朽化対策工事として19年12月に着工した。工期は22年3月31日。

全体の中でもP4～5間のランガー橋では鋼桁の変形が著しく、補修には加熱矯正工法を選択した。同工法はガスを用いて鋼部材を加熱し、油圧ジャッキによる矯正作業を繰り返す方法。変形を戻した上で当て板による補強を行った。

日総産業の先行床施工式フロア型システム吊り足場（クイックデッキ）も採用し、作業の安全性にも配慮した。

橋桁の構造に関わる重要な箇所であること、所在が只見町という豪雪地帯な上に出水期もあり、施工期間が限られることなどから、慎重な事前検討を行うことも、受発注者間および、設計の工



加熱矯正工法で補修した橋桁

イト日本技術開発との協力を綿密に行った。施工中も昔による確立し合いを行うなど打合せを重視することで、同工法による工事を完成させた。

「県内でも施工例の少ない工法で不安はあったが、無事に進められ自信につながった。今後も新しい技術を取り入れながら、若手技術者の育成も進めていきたい」と抱負を述べた。

(13) 2021年(令和3年)12月24日(金曜日) 日刊(土曜、日曜、祝日休刊)

環境建設

事例僅少の 加熱矯正を採用

只見町 寄岩橋の補修工

喜多方市の環境建設(関本榮次代表取締役)は、県内でも美例の少ない加熱矯正工法を採用した只見町の国道252号寄岩橋補修工事現場を、21日に公開した。

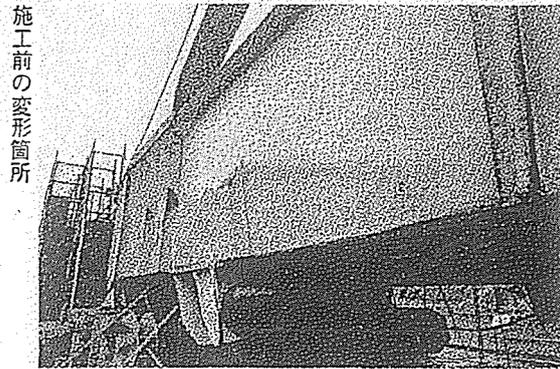
寄岩橋は、1960年に建設した只見町寄岩地内の只見川に架かる橋長249.7m、幅員6(6.6)mの橋梁で、上部工形式に鋼単純合成鉄桁橋4連、鋼単純下路式ラン

ガー工橋、鋼単純合成鉄桁橋3連を採用している。今回の工事は、2011年の新潟・福島豪雨で主桁が著しく変形したことから、補剛桁補修とアーチや桁部分塗装、支承防水処理などの補修工一式を行うもの。発注者は福島県南会津建設事務所、設計はエイト日本技術開発が担当した。橋梁構造上の重要箇所である89.7mの主桁は、只見川の流心部分に位置しており、架設足場のためのベント支持が出来ないことや主要路線で通行止めができないことが課題だった。このた

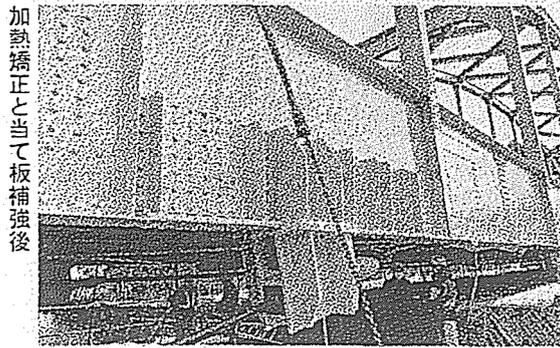
め、施工中でも通行可能な、ガスによる加熱・油圧ジャッキで矯正し当て板補強を行う「加熱矯正工法」で補修した。さらに、日綜産業のフロア型システム吊り足場「クイックデッキ」を採用し、足場面積を広く確保し施工性を高めた。関本竜二常務取締役は「事例が少ない工法かつ自社で初めて取り入れる施工方

法だったので、関係者と慎重に協議検討を重ね施工を進めた」と話した。

工期は22年3月31日で、きょう(24日)中間検査を行い、22年1月下旬に竣工検査を行う予定だ。関本常務は「今後も新技術を積極的に導入し技術力を高めることに、施工現場環境の改善に取り組んでいきたい」と抱負を述べた。



施工前の変形箇所



加熱矯正と当て板補強後